

【探訪プログラムレポート】

2023年2月12日（日）、岡山城の石垣・天守閣、林原美術館を巡る人文知探訪プログラムを実施しました。

13:00 第一部開始

・林原美術館前のご挨拶



谷一館長「岡山市街にはかなりたくさんの石垣が残っており、その年代がわかります。為政者の変遷、関ヶ原の合戦、それ以降と、その都度お城を大きくしていくのでわかりやすいのです。石垣の築造法も変化していき、完成に向かってはいきますが完成した時には戦いが終わっています。それを実際に残っている石垣を見て学びましょう。そのあとは再建された天守閣を見ます。満月の頃は林原美術館からもよく映えますね。良い環境をご覧いただきながら進みましょう」

・石山城方面



谷一館長「石垣の技法は基本的に三種類です。一番古いのが野面積み、ここから見えるように丸い石を使います。そのあと割り込みハギ、その次に切り込みハギで、切り石を使った築造法になってそれが完成形です。岡山城本丸を入ったところで三種類が切りあっている場所があります。石垣を見れば真ん中、右、左の順番で出来上がっているのがわかります」参加者は資料と実際の石垣を交互に見ながら熱心に聴き入りました。

谷一館長「これが所謂最初の岡山城ですが、岡山城ではなく石山城です。ここから一番古い石垣が見えます。まだ岡山ではなく石山と言われていた頃で、岡山には三つの山がありました。石山と、岡山と、天神山ですね。その三つの山を使って城を築くわけです。山の下を山下（サンゲ）といいます、中山下や内山下という名前が残っているのは城があった名残です。以前「岡山市内の山下（オカヤマシナイノヤマシタ）というのはどこですか」と訊かれて、何のことかなと思ったら岡山市内山下（オカヤマシウチサンゲ）のことでしたね。山下というのは、古い城があった城下町には今でも残る名前です。ここから見えるのが石山城曲輪址石垣ですね。これが石山城址、年代でいうと1573年、宇喜多直家がこの城を持っていた金光氏を追い出して自分の居住地にしました。これが岡山の始まりです。そして城下町を整備していきます。初期の石垣というのは1573年に始まります。息子の宇喜多秀家が1590年に秀吉の命令で岡山城を整備していくので、それまでの間が旧岡山城と岡山城下町ですね。古い野面が残っているのがよくわかります。古いものは崩れたりして後で埋め込みもあるので、いろんな石が混在していますね。このあと、秀家が岡山に本丸を移したので明治時代に岡山県岡山市になりますが、もしもここに城があるままだったら石山県だったかもしれませんね。あちらには切り石の小さな石垣が見えますが、あれは明治以降の石垣ですね」

・ 林原美術館横、二の丸跡



「林原美術館がこちらにあります、二の丸跡です。岡山城二の丸跡で野面と切り石が混在しているような形です。ここが内堀で、36ある櫓のうち34の櫓を壊して道路にしています。ちなみに、姫路城は街の外れにあって手を付けずそのままに維持したので完全な形です

から世界遺産というわけです。ここは明治になってすぐ34の櫓を壊したので世界遺産にはならない。つまり、放置されていたから良かったという結果ですね」

・RSK 方面、旧内山下小学校前。



「ここから石山城址が見えまして、二の丸になります。侍屋敷がありました。NHK 岡山放送局が移転する前はお城が見えなかったのですが今は見えるようになりました。そして先ほど36の櫓のうち34はなくなったといいましたが、残った2つは旧国宝です。そのうちの1つが旧内山下小学校の校庭にあり、戦後の重要文化財です。第二次世界大戦の戦災を逃れ、そのままに残っています。明治時代に櫓の大半は取り壊してしまいましたが、残った2つは旧国宝として残り、しかも戦災で失うこともなかったのです。本丸近くにある月見櫓は岡山市のものになっていますが、旧内山下小学校にあるこの櫓はまだ池田家のものなのです。池田家から譲られた証明ができないのです。管理は岡山市がしていますが未だに池田家のもので、月見櫓と違って中が一般公開できません」

・北門跡、城郭配置図前



谷一館長「今は焼肉屋がありますが、ここが北門跡です。この中は二の丸のお屋敷でした。ここに当時の石垣が残っていますね。1590年から1601年の間のものです。宇喜多秀家が整備をしていきましたが、その前に直家が整備していたかもしれず正確なところはわかりません。岡山城下は1590年の築城に始まり、1630年の忠雄の頃まで徐々に整備されていきます。この道路が当時の堀でした。岡山三山を使って城を造り、その周りを城郭にしていきました。内堀、中堀、外堀があり、その外堀は小早川秀秋が関ヶ原後の1601年に岡山城を貰ってからたった二十日で掘らせたといわれます。今の柳川通りが外堀ですね」

ここで谷一館長から参加者に問いかけがあります。

谷一館長「この配置図を見ても不思議だと思いませんか。東側には何もありません。一方で西側には内堀があって中堀があって外堀があり、この外側に西川というもう一つの防具があって、外堀と西川の間に寺町でした。当時は外堀のさらに外の防御にお寺を使っていました。東側は何もないのに西側は四重五重にも防御されている城なんて他ではありません。何故でしょうか」

みな配置図を眺めながら悩みます。ぼつぼつと答えが出てきました。

参加者「西国の敵の攻めを意識していたのでしょうか」

谷一館長「まさにその通りです。西側に敵がいて、東側は全く警戒しなくてもよかったです。羽柴秀吉が織田信長の名代で中国攻めをして、毛利氏と対峙しました。岡山城までやってきた後、備中高松城を水攻めにするのは有名ですね。戦国の争乱というのは常に国境で起こります。この境目争いが大切で、岡山城を造る際に西側の毛利氏に対抗するために何重にも備えました。つまり岡山が戦の最前線だったわけです。本能寺の変で一度歴史が止まります。秀吉は本能寺の変が起こってから復讐を果たすために毛利攻めを一時止めて、中国大返しをします。しかし毛利との境目争いは残り、なかなか戦況は安定しません。だから本能寺の変までで確定していた防御というのが大きく影響しているわけです。だから日本の歴史、特に関西は関ヶ原の影響も大きいですが、その前の本能寺の変が大きいです。特に岡山は本能寺の変の影響が大きい。岡山までは安定しているけれど、その先が安定していないのです」

参加者からも「なるほど。大河ドラマの世界ですね」「戦いの歴史がそのまま地形に残っているなんてすごいですね」と感心の声が上がりました。

谷一館長「そのあとは本丸造りを急ぐのですが、なぜかというとな秀吉が秀家の母親が好きでしょっちゅう東からやってくるのです。山陽道から変形五角形の天守が一番よく見えるように造ってあって、命令した秀吉が一番よく見栄えのいいようにしているわけです。金鳥城と呼ばれるように金箔を使った瓦の使用が認められたのですが、いま建築中のハレノワ付近でも工事中に金箔瓦が出てきました。なぜあんな岡山城の外曲輪から出てきたのかというと、推定ですが秀吉が来た際に泊まる御殿を造れと言ったのではないかという説もあるようです」

道中、参加者から質問も出ました。「石垣の石が少し赤いですが万成石を使っているのです」

ようか」

谷一館長「それも使われているかもしれませんが、万成石をそのまま持ってきたか瀬戸内海の石をそのまま持ってきたかわかりません。色々説がありますが花崗岩がどちらにもありますからどうでしょうね」

谷一館長「ここから石垣の隅が見えますね。隅が崩れるので後から補修するのですが算木積みといって、直方体の石を切り石にして長いほう短いほうを交互に組み合わせていくのです。これが石垣の隅の完成形ですね」

・城下交差点、内堀



谷一館長「ここに内堀の説明がありますね。内堀、中堀、外堀と三重の石垣で囲まれていて最大幅は百メートル。これは城を攻めるときの銃器の発達と関係しています。最初は弓矢、次に鉄砲、そして大筒が届く範囲を考え、大坂夏の陣の頃にはオランダ製大砲が伝わり家康が使うのでその大砲の弾が届く範囲を考えて堀の幅が広がっていきました。今はもう見えませんがシンフォニービル建築の地盤工事の際に内堀の跡が出ています。ここは道路になって便利になっていますが、昔はここが堀だったわけです。江戸時代は便利だと困りますね、敵に攻め込まれてしまいますから。小細工せず綺麗に便利に整備された城郭というのは、徳川家康がもう敵はいないとわかって造らせた名古屋城くらいでしょう」

・西手櫓駐車場前

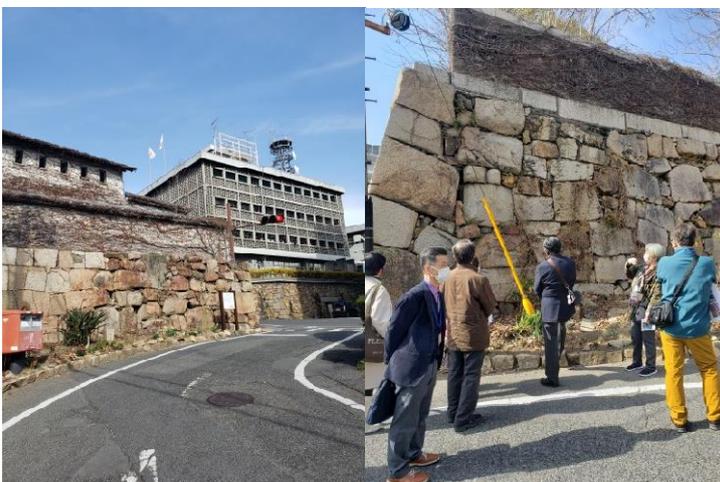


谷一館長「ここが駐車場になったおかげで石垣がよく見えるようになりました。西手櫓は西から毛利が攻めてきたときに石を落とす策に使われたものもわかりますね。1603年、小早川秀秋が岡山をもらうのですが早世したので、その後に池田家が入城します。先ほども言いましたが岡山は最前線です。重要拠点として、池田忠継が藩主として来ました。忠継の父は関ヶ原で功績があった池田輝政で、西国将軍と言われて一族で百万石弱を貰います。小田原攻めの後、輝政は家康の娘を政略結婚で妻とし、その子が忠継です。家康の孫ですから、家康の遺伝子を色濃く継いでいる人が城主となったわけです」

参加者「大河ドラマで出てきそうですね。石垣も大きいですね」

谷一館長「大石が見えますか。あんな大石を遠方から運んできたのかと驚くでしょう。実は薄いんです。最初は大石を運んでいたのかもしれませんが大石を薄く剥いて見せかけている。隅はきちんと切り石を使っていますね。西手櫓は池田家所蔵、重要文化財で1603年頃のもんです」

・石山門跡



谷一館長「ここが旧国宝の石山門跡です。こちらの石垣も向こうと同じ高さまでありました。1601年、小早川の頃に廃城しましたが宇喜多の支城であった富山城がありました。直家が亡くなった後、忠家が秀家の代わりに宇喜多家を支えたのですがその持ち城が富山城。富山城の大手門を小早川の時にここへ移築して石山門とした説があります。石山門は空襲で焼けてしまいました。岡山城を構成していた旧国宝は天守閣、石山門、壊さなかった二つの櫓です。櫓は残りましたが天守閣と石山門は第二次世界大戦で焼け落ちました。この石垣は焼夷弾の直撃を受けた跡です。天守は直撃を受けていませんが、近くの建物に焼夷弾が落ちて類焼。南風だったので天守閣に燃え移って焼け落ちました。ちなみに姫路城は焼夷弾の直撃を受けたのですが不発弾でしたので世界遺産として残りましたね。この辺の赤くなっている石は焼夷弾で石が焼けた色です。戦争の悲惨さを今に伝えますね。石垣は算木積みになっているのがわかります。門があった頃、車は通れませんでした」

石垣の赤茶けた空襲跡を見て参加者は息を飲みます。

参加者「私の妻の父が空襲のシーンを見たいです。裁判所の辺りに住んでいて、岡山城はさすがに文化遺産だから大丈夫だろうと高を括っていたら目の前で燃えだした……と」

谷一館長「岡山の人々は、夜中に天守が焼け落ちるのを見たのですよ」

・林原美術館西側から正面へ

谷一館長「ここが林原美術館の西側で、堀でした。初期の算木積みがあります。こちらは切り石が使われているので切り込みハギ。おそらく一度崩れているので造り直したのでしょう。初期は秀吉が一番の名城を造ろうとお金を出しているのです、石工の技術者を連れてきています」

「これで二の丸を一周しました。第二部は本丸です」

14:00 第一部終了

14:00 第二部開始

・目安橋前



谷一館長「これから宇喜多秀家が造った1590年頃の古い石垣も出てきます。前にある石垣は算木積みではなく、角が細長い大石を使ったのが見えます。初期の石垣を専門で作ってきた近江の石工がいまして、秀吉が連れてきたというわけです。ここから切り石の新しい石垣も見えますが、あれは昭和になってから造っています。この堀は昭和の大洪水までは旭川の水が流れていました。橋も当時は木の橋でした。ただこの堀に水を回していたせいで洪水の時に堤防が切れたので、これはだめだと流れを堰き止めたのです。だからこの流れが汚いのです。昔のように水が流れるようになればいいですが難しいでしょう」

・鳥城公園内



谷一館長「これが瀬戸内海から運んできた大石の形ですね。秀家が石山から岡山に城を移し、ここに本丸を築いた時の石工の仕事です」

・ 記念撮影



・ 鳥城公園内石垣

谷一館長「表向かいの大納戸櫓というのがここにあって、その石垣台です。基本的に丸石を使っていますから野面積みですが、扁平石を隅に算木積みのようにしている初期の例です。これが1601年、小早川が入ってきて櫓を造った時のものです。一部は塗っているわけではなくて苔でしょうか。この上に櫓があったのですが壊してしまって、石垣は綺麗に残っています。戦国時代に石垣の技術が大きく進みました。朝鮮出兵の時に向こうで石垣を造り、その技術が少し入っているといわれています。関ヶ原、大坂夏の陣で兵器が変わってくるのでそれに合わせて堀の幅が変わり、石垣も変わりました。一国一城令が出て平和になってから、小さな支城は廃止されますが石垣は残ります。島原の乱で原城にキリシタンが立て籠る事件が起こりますね。原城もお城は無くなっていましたが石垣は残っていてそれがとても強固だから幕府軍が攻めあぐねるのです。城が無くなって石垣にはそのような歴史が残ります。ここら辺は石垣の断面がよくわかりますね」

・ 天守閣



谷一館長「これが天守の租石です。天守が焼けたあの位置に租石がありました。コンクリートの天守で復元する際に租石があると消えてしまうので同じような配置でここへ移し、コンクリートで天守閣を直しました。天守閣の入り口も当時はこんな無防備ではないですよ。隣にある塩蔵のところから入っていました。復元の時にわざわざ入り口をつけました。1597年の天守です。もし戦災で焼けなければ、日本で唯一、関ヶ原以前の天守が残っている貴重な例でした。ここに焼夷弾が落ちて類焼し天守閣は焼け落ちました。安土城は大昔に焼けていますから、関ヶ原以前では非常に古い、初期の天守の例でした。姫路城は関ヶ原以後ですしね。明治時代以降も池田家はそれを残していたわけですが第二次世界大戦で焼失してしまいました」

参加者「天守閣の瓦が斜めに見えるのはなぜでしょうか」

谷一館長「天守は変形五角形なので、それにあわせて建物をものすごく工夫しています。安土城が同じような形をしていて、それを写したのではないかという説もありますが確証はありません。変形なので下のところから修正しながら、その上へまともな建物を建てますから途中で斜めのものが表れるのです」

15:00まで天守閣内部を自由見学

宇喜多、小早川、池田の年代記前で一部解説もありました。

・宇喜多時代石垣



谷一館長「これが宇喜多時代の石垣です。古い石垣を埋めて地盤を高くして城壁を造りますから、このように発掘すると出てきます。宇喜多時代の石垣を掘って出そうとすると、上に池田の御殿を造っていますから上が消えてしまうのです。ここは予想をつけて最近発掘した場所です」

・ 本丸御殿跡



谷一館長「ここは本丸御殿の跡です。風呂の間や祐筆の間と書いてありますね。池田光政が岡山藩主として戻ってきた二年後に火事で本丸御殿は焼けてしまいます。その時は月見櫓も天守も焼けるのを防いだので御殿だけの焼失で済みました。光政はケチな人で、お金をかけて本丸御殿を造りなおさなくてもいいと言って、本丸はそのままにして今の林原美術館がある二の丸の迎賓館の御殿を在位中ずっと使い続けました。彼が退任して、息子の継政が御殿を造らせてもらいますと言って建てたのがここです。明治時代まで残りました」

・月見櫓



谷一館長「これは1619年の月見櫓です。文化の日前後に一般公開されます。ここで重要なのは、この石はざま。大坂夏の陣の後に造られた最後のはざまです。夏の陣を過ぎると戦乱が無くなりますが、その戦いの実績で培ったノウハウで最後に造った鉄砲はざまです。基本的には石を切り抜いており、従来の矢はざまとは違うものですが、実際には戦いがなかったの使われていません。お城は完成した時には要らなくなるということです。そして城は無くなるけれど石垣を使って籠るような歴史に繋がるのですね。籠城というのは大変ですけど基本的に負けることがない戦い方です。当時の戦い方は、どうやって相手を城からおびき出すかが一番大事。関ヶ原では徳川家康もそこに頭を悩ませて策を練ります。石田三成は長期戦狙いで籠城していたのですが家康の策に翻弄されて外に出されます。野戦になると家康が強いので、何か月もかかる予定の戦いが半日強で終わることになりました。家康も一度死にそうになったことがあって、武田軍相手に若気の至りで外に誘い出されて一人なんとか浜松城に逃げ帰った過去が強烈な印象になっていたのでしょうか。それくらい、城って守るに固い。その完成形がこういうところに見られます」

・岡山城石垣



谷一館長「こちら辺は典型的な切り込みハギですね。綺麗に切り石が揃っています。算木積みもわかりますね。あっちは打ち込みで、向こうは野面。同じ一面の城壁でもいろいろな時代の石垣があるとわかります。ハギは石を剥ぐということが語源でしょう。水抜きもここから見えますね。石垣はこの角度も大事で、よじ登れないように上手に角度をつけています。大体は扇の形で曲線を描くように造っています。これでは敵もさすがに登れないでしょう。あちらにあるのは野面積みですね、初期の算木積みです」

参加者「あれならよじ登れそうですよ」

谷一館長「初期なのでそこまで技術がなかったのでしょう。大石を使うと角度がつけられないですね。ここは新しい石垣ですが石工の力がよくわかります」

・林原美術館正面

谷一館長「ここから、先ほどの天守閣と月見櫓がよく見えます。もう少し向こうには接近する場所があって、十五夜の頃はとても綺麗ですよ。これにて第二部は終了です」

15 : 30 第二部終了

第三部の林原美術館は自由に見学していただきました。